

生きる・支える

障害者、自然体で喜劇

兄が監督務め 川崎舞台の映画

川崎市で10月に開催された「KAWASAKIしんゆり映画祭」で、ダウン症の男性が主演したコメディ映画が公開された。監督を務めた兄が映し出す障害者の自然体の姿に「健常者との懸け橋になる映画」という声寄せられている。

「健常者との懸け橋」反響

映画祭で先月公開



題名は「39窃盗団」。心
神喪失者の不法行為を罰し
ないと定めた刑法39条にち
なんだ。監督は東京都町田

市の押田興将さん(42)。知
だ。知的障害者は罪を犯し
ても刑務所に入らなくてよ
い」と思いこんだ仲間を誘



われ、泥棒行脚に出かける
キヨタケ。空き巣を繰り返
して警察に追われ、酔っぱ
らいに殴られ、野宿生活者
になった後で逮捕され、有
罪判決を受ける。

空き巣に入って財布やカ
バンを盗むように仲間と言
われたキヨタケは、熊の置
物などを取ってくる。それ
でも笑って別の民家の空き
巣を促す仲間との関係がコ
ミカルに描かれている。

興将さんは川崎市の日本
映画学校(現日本映画大
学)を卒業。「うなぎ」を
撮った今村昌平監督のスタ
ッフになった。本業は資金
を募り配役を決めるプロデ
ューサーで、劇映画の監督

は初めて。「切実なテーマ
に向き合ってもらうため、
あえてユーモアを交えた」
横浜市で育った。8人姉
弟の長男。中学時代、周
りに理解されていないと思
いこんで家庭内暴力に走っ
た。木刀を振り回して姉弟
から敬遠された。そんなな
か、清剛さんとの短い会話
だけが救いだっただ。スミ
ズな会話はできず、「飯食
ったか」と声をかける程度
だったが、家族で唯一、つ
ながりを感じられた。

「いつか弟を撮りたい」
と約15年前から企画を温
め、2009年から学校の
ある新百合ヶ丘駅周辺で撮
影を開始。セリフのある場

面は1回だが、時折機嫌を
損ねて動かなくなる清剛さ
んに大好物のコーラを飲ま
せて演技を促し、2年後の
今年、完成した。

映画祭の最終日に特別上
映されると、全113席が
埋まった。養護学校の元職
員は「障害者の様子が自然
で、健常者も寄り添いすぎ
ず対等に描かれている」と
映画祭事務局に感想を寄
せた。福祉施設職員は興将
さんに「上映活動を応援し
たい」と声をかけたとい
う。

町田市で両親と暮らした
がら作業所に通う清剛さん
は「ドラゴンボール」が大
好きで、放映があることを
知ると同じチャンネルでテ
レビを見続ける。興将さん
はそんな弟が時々うらやま
しくなる。「自分を疑わ
ず、あるがままに生きる。
それだけで人生は素晴らし
いってことを伝えたい」
(鹿野幹男)

●押田興将さん(左)川崎市麻生区
●清剛さん(右)と共演したも
う1人の弟大さん(右)押田興将さ
ん提供